

ジャン・パニエからの手紙 - 2007年8月31日

親愛なる友人の皆さまへ、

今、私はオーヴァルにある修道院で、静かな、祈りに満ちた時間を平安の内に過ごしております。過去二、三ヶ月間、私の身に起こったこと、特にバーバラの死を受け入れるための時間として。私は、まだ、彼女が亡くなったことを、なかなか実感できずにいます。

ビル・クラークは、バーバラが亡くなる前日、彼女とともにいることができました。バーバラが入院していた病院の彼女の部屋で、ビル・クラークが司式して献げたごミサでは、バーバラはとても存在感がありました。

ビル・クラークがいっしょにいてくださったことは、バーバラにとって素晴らしい贈物でした。

最後の二時間を、彼女の手をとって、いっしょにいたことができたのは、私にとって大きな恵みでした。

バーバラは目を開けて、私を見ていました。私たちは祈りました。彼女の呼吸と心臓が止まりました。彼女の旅立ちは、穏やかで安らかでした。うめくことも、つぶやくことも、不平不満のことはも、目に見えるような苦しみもなく、神の腕に抱かれる幼子のように眠りに落ちて、旅立って行ったのです。

バーバラの最後の息は、ビルのためでした。ビルが二回目のごミサを献げるために到着した時だったのです。

バーバラは、彼女が生きていた時と同じように、目立たず、ひそやかに息を引き取りました。

私たちは、皆が彼女のそばで祈れるように共同体の家に彼女のなきがらを連れて帰ることができました。

彼女の告別ミサの前夜、ロワーズの五つの共同体から私たちの多くが、近くの、また遠方から多くの友人が、バーバラの人生と与えられた才能とをたたえるために集まり、一九六五年八月に、バーバラがやって来て以来、彼女がラルシュのためにしてくださったことすべてに対し、感謝をささげました。

世界中でラルシュが成長するに当たって起こったすべてのことの中心におり、心であったのがバーバラでした。

バーバラはとても大勢の新しいアシスタントを迎え入れてくださり、しかも多くの方が今も残っており、ラルシュの新しい共同体を創設するために、今も尽力してくださっている人たちもいます。

ビルと世界のあちこちから来てくださった十九人の司祭の共同司式によって、バーバラの告別ミサが執り行われました。

いかにバーバラが多くの私たちの心を、そして司祭たちの心を養い育ててくれたかを、ビルは私たちに思い起こさせてくれました。

息を引き取る少し前にバーバラは、ある人の言葉を引用して言いました。「いたまない限り、私はいたみなんて気にしないわ！」彼女はいつもユーモアのセンスを忘れませんでした。このオーヴァルにいる間、私は、一九六四年以来、共同体や友人あてに出した私の手紙を集めて本にするための校正刷りを、読んでいました。この本は、カナダで、ハーパー・コリンズ社（Harper Collins）から（当面は英語文のみです）今年の十月に出版される予定の五六〇ページもあるものです。前回の本は、十年前、ジョン・スマラ（John Sumarah）によって編纂され、一九九四年までの手紙が収められていました。

これらの手紙には、ラルシュが始まった頃の話や私自身の旅行、インド、ハイチ、ホンジュラス、象牙海岸（コートジボアール）、そしてブルキナファソにあるラルシュの日々の出来事などが書かれています。また、世界中のラルシュや「信仰と光」の成長についても書かれています。私は四十三年間に亘る物語を読んで、感動いたしました。

事実、私は起こったことすべてに驚きました。神がそこにおられ、これらの旅において、私たちが自分ですべてをやっているかのような印象を与えながら、神の思慮深いなさり方で、私たち全員を導いておられることが、とてもはっきりしています。

このようにして神は、私たち全員を通して出来事を導いておられ、また、ビジョン（未来の展望）に深くかかわるように人々を元気づけておられます。

私たちの世界では、知的障害のある人たちは、しばしば問題視され、苦しく辛いものとみなされています（勿論、ある親御さんたちにとっては、そういうこともあります）けれども、この本は、どうして神がすべての教会や宗教で、また、いろいろな文化の中で、逆らいのしるしと同時に平和のしるしとして彼らを選ばれたのか、より広い見方を示しています。もし私たちの世界や社会において私たちが、彼らとともにいる時間をもち、そして彼らや年配の老人や精神的に病んでいる人のような、弱くて傷つきやすい人たちと、真の関係に入るならば、彼らは、彼らに対し閉ざされていて、頑なに、そして防衛的な私たちの心を、彼らに開かれた、そして愛情のこもった心に変えてくれるのです。

こうして彼らは、私たちの素晴らしい教師になります。親しい交わりを通して、また、親しく交われる場所で、世界や人生の本当の意味と目的を、私たちが理解するのを助けてくれる教師です。自分自身のために、より多くの富や権力、名声、安全・安心、そして快楽を求めるのではなく、私たちの世界をより良い世界にすること、その人の文化や能力や障害に関係なく、一人ひとりの人間がもっと人間らしく平和と自由のうちに成長できる社会にするという本当の目的を理解するのを助けてくれるのです。そのような社会では、違いは脅威ではなく、賜物と見なされるのです。

ラルシュと「信仰と光」は、世界中に広まりながら生まれつつある新しい世界のしるしとなることができます。しかし勿論、そのようになるには、私たち全員がすべての共同体に

において、真剣に取り組まなければならないことを意味しています。この大いなる愛に向かう変容は、容易にはやって来ません。愛によって他者に心を開くこと、特に私たちが苦手とする人たちに対して心を開くことは、容易ではありません。彼らの前に無防備になるのは、全く容易ではないのです。共同体生活に忠実であるのは、容易ではありません。

私たちは皆、小さくされること、傷つけられることに少しばかり怯えています。この変容に関しては、明らかに私たちは、愛する神から流れ来る力、聖霊の賜物から流れ来る力が必要です。主はエルサレムを見て次のように言われましたが、今日の私たちの世界を見てイエスが、泣いておられないことなどありえないと、私は思うのです。

「もしお前も平和への道をわきまえていたなら…。しかし今は、それがお前には見えない。」ルカ福音書 19 章 41 節

このオーヴァルで私は、デイビッド・フォード (David Ford) 著の新刊本「キリスト者の知恵 (Christian Wisdom)」を楽しく読んでいます。(Cambridge University Press 発行) この本の中にラルシュの知恵について素晴らしい章があります。それは、人間同士のつながりの上に造られ、私たちの世界に対するしるしとなれるように、つながりを変えることによって自分たちの道を探し求めるラルシュ共同体の知恵について書いてあるものです。

この本で彼は、まず聖書にあるイエスのみ言葉の引用によって知恵を探し求めます。

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」(ルカ福音書 10 章 21 節)

デイビッド・フォードは私たちに(私も含めて)神を求めて聖書を読むように呼びかけています。読むことで私たちは神に感謝するようになり、祈りの心で聖書を読むようになると、神との交わりが深まり、人類への愛が養われ、今日の私たちの世界に神が何を作りあげようとしておられるかをますます深く知るようになるのです。これは素晴らしい本です。私は、デイビッドの知恵ある助言に従うべく努力いたしております。そして新しい、より深い方法で聖書を読んでいるのです。そうすることで私は、並外れた神の優しさを発見しています - それは失望している人、捨て置かれている人、弱く傷つきやすい人、食べ物や愛情に飢えている人、あるいは愛について全く知らずに誤った理解をさせられてしまった人に対する神の優しさです。宗教としての聖書は、分裂の原因となることがあります。「私の宗教のほうがあなたの宗教よりもすぐれている」という態度は、優越感を生みます。しかし、聖書や宗教は、神とのつなぎ役になることができます - それは、私たちをより優れた謙遜、貧しさ、愛の神との一致へと導く、そして神が愛するように他者を愛する愛へと導く、神との交わりの手段のようなものです。年を重ねるにしたがって私は、聖書についてあまりにも知らないことが多く、従ってわかっていることはほんの少しだということが分かってきました。しかし私には、それにも増して愛の知恵に心を開きたいという、大きな願望があります。

なんと私は一年以内に八十歳になります。信じられません。なぜ時はこんなにも早く過ぎるのでしょう。今日、ラルシュや「信仰と光」で責任を担ってくださっている皆様に感謝いたします。特にジャン-クリストフ・パスカルとクリスティン・マックグリービーに感謝したいと思います。私たちのこの二つの共同体組織(訳註:「ラルシュ」と「信仰と光」)は、お互いに手に手を取り合って、考えでも心の面でも仲良くやっていると私は感じています。この二つの共同体組織は、愛と共感という共通の霊性によって一緒に成長しています。創立者として(「信仰と光」ではマリー-エレン・マチューと共同創立) 平安と信頼のうち引退できることは、大きな恵みです。神のはからいはすばらしいものです。

私は二、三日以内にトロリーへ戻ります。そこには、この手紙をタイプしてくれるバーバラはいません。バーバラの死をどうやって乗り越えるか、クリスティン・マックグリービーといっしょに新しい道を考えてみます。今年は少し余裕があります。ですから私はこれからトロリーの畑(La Ferme)という家で、リトリートが続けて行きたいと思っています。また時々、他の所でもリトリートをやりたいと思っています。私は九月にはリトアニアへ、そして十月にはウクライナへ、「信仰と光」のために、そしてラルシュを準備中の若者たちのために、リトリートを開きに行く予定です。障害を持つ人々が、どれほど私たち皆を変える源であり、神の心へと至る道であり、更に平和の教師であるのかを告げ知らせることは、私の喜びです。そしてアルバートやアンドレ、そして他の大勢の人たちといっしょに家にいることは、私の大きな喜びです。私の心を神に向けて変えるという働きは、日々の生活を生きるという祝いと傷つきによって続いております。

私は、この手紙を感謝の言葉で結びたいと思います。多くの方々から、バーバラの死を悼み、バーバラが皆様にとってどれ程大切な人だったかを伝える手紙を、私や共同体にお送りをいただきました。申し訳ないのですが、皆様のお一人おひとりに返事を差し上げることが出来ません。一言申し上げたいのは、私は、非常にたくさんの皆様からの手紙やメールに、とても感動いたしました。皆様と心をつなげて、バーバラの人生に対し神に感謝いたします。彼女は、以前と変わることなく、私をそして私たち皆をそっと見守り続けてくれることでしょう。

皆様お一人おひとりに平和と愛がありますように

ジャン・バニエ